

# しらふじ

第94号

令和5年8月1日

発行/更生保護法人

しらふじ

発行責任者/大野美雄

編集責任者/松本英史

## 6年ぶりに

# 料理教室開催

コロナ禍、中断されていた料理教室が久しぶりに再開されました。メニューはホットプレートで手軽に作れる焼きそば。料理をほとんどしたことのない男性利用者たちも、ボランティアの皆さんと協力し合いながらの焼きそば作りに終始笑顔。各種事業が中止になっていましたが、やっと再開できるようになり、いろんな活動で利用者の社会復帰を支援していきます。

## ホットプレートで焼きそば作り



更女の会の手助けを受けながら焼きそばをつくる利用者

### 更女の皆さんと 楽しく、豪快に

料理教室は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で中止になっており、実に6年ぶりの開催となりました。食堂を会場に、利用者11人、ボランティアとして松江更生保護女性会城北支部から4人の参加をいただきました。「皆で共同して作業ができ、野菜も多く取れるように」との上田料理長の提案で、メニューは「ホットプレートで作る焼きそば」。

4つのグループに分かれて、まずは野菜のカットから。男性利用者の中には初めて包丁を持つ人もいて、更女の皆さんの指導を受けながら野菜を切り、ホットプレートで麺と野菜、肉を炒めて…。食堂内にはおいしそうなにおいが漂い始め、ボリュームたっぷりの焼きそばが次々と出来上がりました。テーブルにドンと置かれた焼きそばを囲み、参加者たちはワイワイ、ガ

ヤガヤと楽しく、そして豪快に焼きそばをほおぼっていました。

利用者が社会復帰していく中で、食事は大きな課題となつていきます。健康を考えると肉ばかりでなく野菜もしっかりと取ってもらいたい。外食ばかりでは味に飽き、お金がかかるという問題もあります。ホットプレートを使って、手軽に焼きそばが作れば、ペコペコのお腹を満たすことができ、元気も出ます。参加者たちの満足そうな表情が印象的でした。



出来上がった料理を囲み、「いただきまーす」

## ご協力、ありがとうございます

自分たちで作った料理と一緒に食べることで、おいしさは数倍にも増す気がしました。グループそれぞれ違った雰囲気できりやかな料理教室となりました。

(内田 桂子さん)

初対面で緊張していましたが、息子と話すような思いで気軽に話ができ会話が弾みました。皆さんとお話しください、楽しい食事会となりました。

(小畑 亮子さん)

皆さんとても手際が良くスムーズに仕上がりました。子どものころのお母さんの味を思い出しながら包丁を握るのもいいですね。大切な心の栄養です。

(曾田 テイ子さん)

これからの調理ボランティアでも仲良く、楽しくやっていたい気持ちでいっぱいになりました。七味唐辛子を勧められ、とつてもおいしくいただき、皆さんの温かい気持ちがいれしかったです。

(赤穂 三枝子さん)

## 利用者の感想

目標を持ってみんなで取り組むってすごく楽しいなって感じました。更女の方もおいしいと喜んでくれ、おいしかったのですごくいい時間になりました。私たちを支え応援していただいている人を次こそ裏切らないよう頑張りたいと思います。

(Y・Kさん)

最初はいやいや作っていたのですが、いつの間にか楽しくなってきました。「しらふじ」を卒業したら全部自分でやっていかなければなりません。今日のことを無駄にしないように、自立ができるように生活したいと思っています。

(Y・Sさん)

初めて料理を試してみたら楽しくなり、今後、一人暮らしを始めた時に料理を作っていきたいと思えました。今回の場を作ってくくださった皆さまに感謝しています。

(K・Kさん)

## 施設の運営にご協力をお願い

施設や事業の充実のために物品や資金が必要です。そのためご寄贈をお願いし、会員を募集しています。会員と年会費は下記のとおりです。

しらふじ友の会  
会員の募集

- 賛助会員 2,000円以上
- 普通会員 5,000円以上
- 特別会員 10,000円以上
- 法人会員 20,000円以上

入金及び寄付金振込先  
ゆうちょ銀行(口座番号)  
01450-1-30366  
加入者名  
更生保護法人しらふじ

詳しいことは、下記までおたずねください。  
更生保護法人しらふじ 松江市奥谷町306-1  
TEL 0852-21-5383 FAX 0852-67-5393  
メールアドレス: shimanekouseihogokai@sage.ocn.ne.jp  
H P アドレス: http://shirafuji-shimane.com

しらふじ 検索 でも検索できます。

# 聞こえてますか

## かつこうの音が

No. 2

題字  
袋井市曹洞宗可睡齋前山主  
安来市曹洞宗松源寺東堂  
佐瀬道淳老師

元更生保護法人島根更生保護会主幹

川井 昭一

前号のあらすじ

無期刑の受刑者・中里直（仮名）の環境調整を引き受けた川井氏が、生い立ちや事件の背景を調べる。中里は中学卒業後、土木作業員になり、結婚して子どもをもうけますが長続きせず、酒におぼれて家族と離散。たまたま飲食代を請求した飲食店主を殺害し、遺体を海に遺棄して無期刑を言い渡されます。

帰住まで年一回の面会と折に触れ手紙のやり取りが続いた。中里からの手紙も少しずつ内容が変わり、心の内を見せてくれるようになってきた。初めは、あれだけ残虐としか言いようのない行為を犯しながら、母親への思慕を訴える手紙が奇異に映った。しかし便りを重ねるうちに、彼の思いを素直に受け止めることができるようになっていったのは不思議である。

それからは手紙を書くときは、まず母親に電話をかけ、その内容を知らせるようにしていたが、年が明け母親は持病が悪化したのか、か細い声で身体の不調を訴えるようになった。これでは、中里がいかに早く仮出獄の恩恵に浴したとしても、生前の対面はおぼつかないのではと思えた。それというのも、私

の周辺にも不幸が続いたせいであった。

宿直明けのある日、母親に会おうと特急に乗って中里の郷里に向かった。あらかじめ連絡しておいたので、弟嫁が駅まで車で迎えに来ていた。山あいの青々とした田畑の中の道を車で二〇分ほど走ったところに中里の生家はあった。母親が玄関まで私を迎えに出ており、あいさつを済ませると部屋に案内された。「おかげさんで、直の様子がよく分かります。弟に遠慮して、家にはたまにしか便りもくれませんでした」と母親は礼を言った後、私の問いも交えながら、中里の生い立ちや事件が起きたときの家族の苦しみを話してくれたのだった。

「あれは、正月の新年宴会があったときです。ここじゃあ、皆寄って正月ば祝うことになつとりますけん、うちでは息子と二人出かけたんです。会長あいさつが済むと皆で飲んだり、歌ば歌ったりするとです。私たちも人に負けんよう騒ぎ

ましたばい」。宴会が済んで二人が家に帰ってくつろいでいると、隣家の主人がやって来たのだった。「ちよつと話があるけん、上がらしてもららうばい」。何も知らない親子は気軽に彼を通じた。「あんたたち、なあーんも知らんとな」。「なんのことじゃるか」。「あんたたち、宴会の時の皆



写真はイメージです(大西大和氏提供)

の様子がおかしかったと、思わ  
んだったのか。「……………」。「あ

れはなあ、お前んとこの直さん  
が人ば殺しとると聞いとつたか  
らたい。みーんな知つとつたば  
い。「うそばつかり……………」。そ  
の言葉を事実として受け入れた  
時、身体の震えが止まらなかつ  
たと言う。「こげなとき、よう  
歌えるもんたい」。「あんなた  
ち、気が狂つたじやろかい」。自  
分たち親子を見つめる村人の冷  
やかかな目が浮かぶのだった。  
外に出るのが恐ろしかった。「先  
生、こん時の私たちの気持ち、  
だあれも分かつてくれんでしょ  
う」。

私はここに来る前に約束して  
いたことがあった。中里に代わっ  
て母親に会つたときに、生命を  
持った形見になるもの、手塩に  
掛けた草花や植木を預かつてお  
き、彼が仮出獄した日に渡そう  
と思つていた。私の心情を率直  
に母親に伝えると、「是非来て  
ほしい。庭にある植木を掘りま

すので……………」。母親も喜んで答  
えてくれた。

用意してあつた、持ち帰るの  
に手ごろな大きさの白藤と白南  
天の植木を受け取つた。植木は  
二本とも当保護会の庭に根付い  
て大きく伸びていった。いつか  
この藤が咲いたとき、彼はその  
花を見て何を感じるだろうか。  
花を見て何を感じるだろうか。  
できることなら、母親と彼をそ  
の花の下に立たせてやりたい。  
そして傍らに二人を見ている私  
もいる。そんな日が来るだろう  
かと夢想しつつ、つるを伸ばし  
た藤の木を朝夕眺めていた。

(続く)



## お便り

社会復帰して3年6カ月、間もなく72歳に  
なります。ガードマンの仕事は大変ですが、働  
けるうちは仕事を続けます。

(K・Hさんからの絵手紙)



## 「法話の集い」利用者感想

話を聞いて、毎日の生活そのものが修行と受け  
止め、生活していかねばならないと思えました。

(T・Mさん)

中学、高校と通つていた施設にお寺があり、座  
禅やお経を唱えていたことを思い出し、久しぶり  
の座禅で心身ともに落ち着きました。心が乱れた  
ときは座禅をして、心を落ち着けようと思えます。

(N・Hさん)

座禅をして思つたことは、被害者の方への謝罪  
の気持ちを一忘れたいいけないこと、離れて暮  
らす子どもたちに対して、恥ずかしくない生活を  
しなければならぬということ。そして、感  
謝の気持ちを忘れずに、毎日を一生懸命に生きて  
いくことだと思えました。

(K・Uさん)

# 来訪者

(敬称略)

- ◆ 松江地区更生保護女性会食事支援  
城北支部 2名・古志原支部 1名
- ◆ 松江地区更生保護女性会食事支援  
城北支部 2名・秋鹿支部 1名  
大野支部 1名・BBS 1名
- ◆ 松江地区更生保護女性会  
コラージ作成会 川津支部 4名
- ◆ 法話の集い 養善寺 西古 孝志 師
- ◆ 佐田地区更生保護女性会視察 4名
- ◆ 松江地区更生保護女性会食事支援  
乃木支部 1名・古志原支部 1名  
城北支部 1名
- ◆ 松江地区更生保護女性会  
コラージ作成会 生馬支部 3名
- ◆ 転任の挨拶 松江刑務所所長
- ◆ 松江家庭裁判所調査官 2名
- ◆ 着任挨拶 松江保護観察所所長
- ◆ 奉仕作業
- ◆ 松江地区更生保護女性会忌部支部 4名
- ◆ 着任挨拶 松江刑務所所長
- ◆ 松江地区更生保護女性会食事支援  
大庭支部 1名・忌部支部 1名  
城北支部 2名
- ◆ 松江地区更生保護女性会  
コラージ作成会 古江支部 3名
- ◆ 鳥取給産会理事長 竣工式について
- ◆ 中国地方更生保護委員会委員長視察
- ◆ 調理教室参加
- ◆ 松江地区更生保護女性会 4名
- ◆ 松江地区更生保護女性会食事支援  
城北支部 3名・城東支部 2名
- ◆ 松江地区更生保護女性会  
コラージ作成会 秋鹿支部 3名
- ◆ 断酒会会員 2名

# 寄付金

(敬称略)

- ◆ 法話の集い 玉雲寺 曾根 慎吾 師  
奉仕作業
- ◆ 松江地区更生保護女性会城東支部 4名
- ◆ 佐田地区更生保護女性会視察 32名
- ◆ 松江地区更生保護女性会食事支援  
本庄支部 1名・城北支部 2名  
朝酌支部 1名・BBS 2名
- ◆ 江津済生会病院無料健康診断 6名  
(令和5年1月1日～令和5年6月30日)
- ◆ 浜田地区更生保護女性会浜田支部  
西徳都
- ◆ 佐田地区更生保護女性会
- ◆ 松江地区更生保護女性会大庭支部
- ◆ 古川義郎
- ◆ 美保閑地区更生保護女性会
- ◆ 古藤美紀
- ◆ 福代明正
- ◆ 田中廣
- ◆ 林哲人  
(令和5年1月1日～令和5年6月30日)

# 寄付品

(敬称略)

- ◆ 服部建創／米
- ◆ 金築育代／米
- ◆ 橋本忠夫／お茶
- ◆ 石川咲子／洗剤
- ◆ 浪花秀明／お菓子
- ◆ 小山美子／野菜
- ◆ 西尾聡／衣類
- ◆ 更生保護施設等支援協議会  
(事務局 藤本晴雄)／お菓子

# 助成金

- ◆ 佐田地区更生保護女性会八幡原支部  
／米・衣類・日用品
- ◆ 金森惣／電気製品
- ◆ 内田光代・廣澤延子・中村美枝子  
／衣類・食品・野菜
- ◆ 仙田節子／米
- ◆ 佐々木道子／野菜
- ◆ カナツ技建工業(株)／作業着
- ◆ 小西／作業着
- ◆ 松江地区更生保護女性会／お菓子
- ◆ 青木薫代／お菓子
- ◆ 小笹登志郎／衣類
- ◆ 陶山和實／マスク
- ◆ 松本成／履物
- ◆ 吉野光徳／野菜
- ◆ 日新電工会長 吉野光徳／作業着
- ◆ 河上摩耶／作業着・衣類  
(令和5年1月1日～令和5年6月30日)
- ◆ 島根県保護観察協会  
(令和5年1月1日～令和5年6月30日)

# しらふじ友の会

(敬称略)

- ◆ 【賛助会員】
- ◆ 内藤昇
- ◆ 黒田西原なごやか会
- ◆ 【特別会員】
- ◆ 西宗寺
- ◆ 佐々木滋子
- ◆ 安来地区保護司会
- ◆ 曹洞宗保護司連合会島根県第二宗務所支部  
(令和5年1月1日～令和5年6月30日)
- ◆ 【普通会員】
- ◆ 藤原三葉
- ◆ 杉山悦子



# 菜園



野菜の苗を植え付ける利用者たち

「じらふじ」にはミニ菜園があり、原補導主任を中心に野菜を作っています。今年もトマト、ナスび、ピーマンの苗を植え付けました。手伝った利用者は「農家出身で、収穫の時間を思い浮かべながら楽しい時間を過ごした」と話していました。



# 断酒会

コロナ禍、中断していた断酒会を1年3カ月ぶりに開催。断酒会のメンバーや利用者ら10人が胸襟を開いて語り合いました。



断酒について語り合う参加者

# 白南天



石見銀山を舞台にした千早茜さんの小説「しろがねの葉」が直木賞に選ばれて以来、世界遺産・石見銀山に再び注目が集まっています。世界遺産登録から16年。登録時の興奮は徐々に静まり、コロナ禍もあって関心度、認知度ともやや陰りをみせていただけに、まさに救いの神といったところです。

28年前、大田市であった講演会で、当時の副知事が「石見銀山の世界遺産登録を目指す」とぶち上げたのが、そもそもの始まりでした。「地元へのリブサービス」と高をくくりながらも、3人の専門家に意見を求めたところ、2人が「価値あり」、残る一人も「可能性はある」。慌てて新聞社の編集局内に取材班を作り、企画やシンポジウムなどに携わってきました。

まるで雲をつかむような取材から始まり、少しずつ石見銀山の価値、魅力が分かり始めたものの、果たして実像?にどこまで迫れたのか自信はありません。しかし、取材のたびに新たな発見がある石見銀山の魅力に取りつかれて約10年。登



公開された初歩の久保大当時のマスコミ

録の可否を決める世界遺産委員会が開かれた「ニュージブラント・クライストチャーチから登録を知らせる電話が入ったとたん、編集局内に大きな歓声と拍手が響き、興奮しながら紙面を作っていたことをまるで昨日のように思い出します。

そんなこんなで手にした「しろがねの葉」。驚いたのは千早さんの緻密な取材、そしてタイトル名の「しろがねの葉」でした。小説の初めのころ、主人公のウメが闇に光る葉をつかみます。それは銀を根元から吸い上げて光る「蛇の寝(ゴキ)」でした。「えっ、光る葉にフォーカスしたの?」とビックリ。実は、新聞社の連載企画でも「果たして山(仙ノ山)は光ったのか」をテーマに取り上げ、銀鉱脈近くのシダは銀色に光るとのネタもあり、面白いと思って取材班で議論を重ねたことがあったからです。しかし、どうしても確証は得られず、「科学的には光らない」「東北の鉱山には光ったという伝承が数多くある」と、報道でありがちな「両論併記」でお茶を濁した、それこそ渋いお茶をのんだ後味の悪さまで思い出していました。

小説家の千早さんは、まさに、その夢のような話からストーリーを展開していったわけで、その着眼には驚くばかりです。千早さんに喝采をおくり、月並みですが石見銀山がさらなる輝きを放つことをただただ願うばかりです。(瑛)